

麻薬・覚せい剤など

覚せい剤取締法違反による検挙者は減少傾向にありますが、大麻や麻薬取締法違反については摂取方法が簡単で抵抗感がないことや、未成年者の喫煙程度の罪の意識から、大学生を中心とした青少年に急激な広がりをみせており、検挙者が増加傾向にあります。

そのため全国の大学では違法薬物乱用防止のために啓蒙活動に力を注ぐと同時に、検挙者には厳しい処分を科しています。

本学では、一年次セミナーにおける警視庁の専門官による違法薬物の犯罪や人体に及ぼす影響等の講演、2年生以上には薬物乱用防止啓蒙DVDの視聴等、啓蒙教育を実施しており、薬物犯罪（大麻、薬、あへん、覚せい剤等の所持、使用、売買又はその仲介）に関わった学生に対しては、「学生処分規程」において退学処分と定めています。

薬物の乱用

薬物は本来、治療や検査のために医療目的で使われるものです。薬物をその目的以外に使用すれば、たとえ1回の使用であっても乱用になります。薬物の乱用はそれ自体も犯罪で、なおかつ乱用者の健康を脅かすだけでなく、殺人、強盗、傷害、放火、窃盗などの犯罪を引き起こし、社会の崩壊につながる人類共通の問題です。薬物に手を染めることは、学生生活はもとより、1度きりの大切な人生を崩壊させてしまうことでもあります。

やせられる薬、元気が出る薬

薬物の乱用が非常に危険なことは皆さんもよく知っていることだと思います。「自分はそんな薬に好奇心もないし、ましてや快楽のために薬物に手を出すようなことはありえない」と思っているかもしれません。しかし、もし身近な人から「ダイエットにすごく効果のある薬」「不眠によく効く薬」あるいは「自分に自信が付き元気がでる薬」があり、それを無料で分けてくれると言われたらどうでしょうか。実はこのような誘いから危険な薬物とは知らずに手を出してしまうというのが最近の傾向です。何回か使用しているうちに少しずつお金を取るようになり、やめられなくなった頃には数万円も要求され、薬代欲しさで犯罪にまで手を染めてしまう可能性もあります。



「やせられる」「よく眠れる」「集中力がつく」などの良いイメージは、薬物を不法に販売しようとする側がつくった虚像です。たとえ一時効果があったとしても、依存症などにより確実に健康を害し、人生を台無しにしてしまいます。

薬物の種類

精神に影響を及ぼす物質の中で、習慣性があり、乱用され、または乱用される恐れのある薬物には、覚せい剤、大麻、MDMA、コカイン、ヘロイン、LSD、向精神薬などがあり、これらの取り扱いは法令により禁止または制限されています。

■覚せい剤

薬物事犯の7割が覚せい剤によるものです。「シャブ」「クスリ」などという俗称がよく知られていますが、最近では「S（エス）」「アイス」「スピード」等と呼ばれており、悪いものを使っている意識がなく、ファッション感覚で乱用してしまいます。また「ヤーバー」と呼ばれる錠剤型の覚せい剤や、「アプリ」という吸引法が若者の間で流行しています。覚せい剤は、特に依存性が強く、乱用を続けると、中枢神経に異常を来し、幻想や妄想に襲われます。また、頬がこけ、歯が抜け落ちるなど、身体への影響も大きく、大量に摂取すると死に至る場合もあります。

■大 麻

大学生が関わった事犯の多くは大麻によるものです。大麻には、大麻草を乾燥させた乾燥大麻（マリファナ）、樹脂や若芽をすりつぶして固めた大麻樹脂（ハシッシュ）があります。大麻についても乾燥大麻を「ハッパ」、大麻樹脂を「チョコ」などと呼び、ファッション感覚で乱用してしまいます。大麻を乱用すると、感覚が過敏になり、変調をきたしたり、感情が不安定になったりします。このため、興奮状態に陥り、幻覚や妄想などに襲われます。また、何もやる気のない状態となる「無動機症候群」に陥ることもあります。

■MDMA

急激な勢いで20歳代の若者の間に広まっているのがMDMAです。MDMAは、覚せい剤と似た化学構造を有する薬物で、けしやコカ等の植物からではなく、化学薬品から合成された麻薬の一種です。「エクスタシー」「バツ」「タマ」などと呼ばれていますが、麻薬であることに変わりありません。多くは、さまざまな着色がされ、文字やブランドのロゴや絵柄の刻印が入った錠剤でサプリメントを連想させるような色や形で密売されています。中にはピンクに着色されたハート型のものまであり、一見ただけでは危険な薬物には見えません。

MDMAは、視覚、聴覚を変化させ、その乱用は、不安や不眠などをもたらします。また、強い精神的依存性があり、乱用によって錯乱状態に陥ることがあるほか、心身にも障害を引き起こすことがあり、特に脳機能への悪影響が指摘されているほか、死亡例も報告されています。

■危険ドラッグ（違法ドラッグ）

薬物取締法令に触れることなく、麻薬や覚せい剤と同様の多幸福感や性的快感等が得られることを宣伝文句に、いわゆる「危険ドラッグ」が販売され、乱用するケースがあります。危険ドラッグは「法の規制の間をすりぬけた薬物」ということですが、あたかも法的に許された薬物であるかのように扱われ、合法であるから安全であるといった錯誤から乱用してしまいます。しかし、危険ドラッグは麻薬や覚せい剤に類似した化学構造を持っており、依存性や精神荒廃など脳に強いダメージを与える可能性があります。また、他の禁止薬物と同じように精神錯乱、妄想や強迫観念から関わりのない人に危害を及ぼす可能性があり、乱用者の死亡例も報告されています。このため、最近では覚せい剤などと同じように有害作用を有するマジックマッシュルームやBZPなどの危険ドラッグが麻薬に指定されました。さらに危険ドラッグは「ゲートウェイドラッグ（入門薬）」とも言われ、多くの場合覚せい剤や、大麻などの禁止薬物への乱用へ移行してしまいます。危険ドラッグは厳密には各種の法律に触れることから現在では「違法ドラッグ」と呼称を改めるよう働きかけがされています。



禁止薬物は必死になってその本来の姿を隠そうとしています。それは、明るく、楽しく、おしゃれで、カッコイイといったイメージです。このようなイメージ戦略にだまされ、乱用薬物が若年層へ拡大してきました。MDMA等錠剤型合成麻薬は、他の薬物のように人目を避けて注射したり、火であぶり吸引する手間が要らず、容易に口から摂取することができ、その錠剤の形もカラフルでかわいいものです。呼称についても何となくカッコよく、ファッションナブルな印象を受けます。そのため抵抗感や罪悪感が希薄になり、最近では高校生や大学生が学校内でMDMAを売買する事件すら発生しています。

海外旅行と薬物

旅行など海外へ出かける機会も少なくないと思います。国内はもちろん、とかく気のゆるみがちな海外旅行などの際に薬物に手を出してしまうケースもあります。国によっては薬物犯罪には厳罰をもって対処しています。特にアジアの国々では最高刑を死刑としている国も多くあります。また、世界各地で麻薬所持などのために刑務所に収容されている日本人も少なくないそうです。違法薬物に自分から手を出さないことはもとより、自分が望まなくても麻薬取引に巻き込まれる危険もあることを肝に命じておくことが賢明です。



(財)麻薬・覚せい剤乱用防止センター
<http://www.dapc.or.jp/>